

船団

第 110 号

特集

わたしたちの俳句生活



第八回船団賞受賞作

AMラジオ

早瀬 淳一

ハンガーにハンガーぶら下がる二月

自転車を押せば濃くなる天の川

早春の少し汚れたパンナイフ

秋深し布団袋にある布団

春昼のごみ箱いつも待つかたち

骨格の大きな手から柿貰う

永き日の偉そうにするいなり寿司

折畳み傘折りたたまれて晩秋

カステラがかすかに乾く雛祭

カップ麺三分待てば冬に入る

一つだけ部品の足りぬ走馬燈

トラックのAMラジオ漏れて冬

「信号が青になりました」カナカナカナ

永遠がかたちとなりて長火鉢

秋風をゆっくり通す針の穴

整然とならぶ蹄鉄冬夕焼

十月のバカ正直な自動ドア

路線バス次は次は次は冬

ハンカチの木の実真鍮の写真立

噴水が墓地めいている十二月

若林 武史

菜の花は海のどこまで見てますか
安部公房再読して春ゾウに乗る
身体から流れる春の水の音
終わりなき旅マスク一枚ずつ使う
四月ばか遊覧船の吐く飛沫
金髪にしたのどうして桜咲く
春の水パントマイムの人に恋

若森 京子

古書店に蹄の音す菜の花忌
花冷えやはるか臍呼吸の記憶
弟よ背によみがえる芹の息
にんげんも蛙も臍出し子供の日
風のアカシヤ羅漢崩れてゆくように
二度寝して巣箱に棲みしごちする
晩年や羽化をはじめる春帽子

●会員作品●

渡部 ひとみ

鳥曇弦を押す指弾く指
デッサンにサインを入れる麦の秋
一輪の空色のバラ本棚へ
初夏の彫塑の欠片転がって
緑陰に乾くベンチと猫と我
アイスコーヒー遊覧船に持ちこんで
水槽の泡のとぎれて夏の月

赤石 忍

右眉をムーと名づけて夏が行く
梅雨明けて右足だけが伸びている
夏だから下唇を噛んでみた
オムライス底に赤い赤いマグマだ
薫風をちぎってマシユマロにする
眼の裏に太陽がいっぱい籐の椅子
太腿がジュラ紀の夏を闊歩する

赤坂 恒子

菜の花やおぼけとなりしシヨベルカー
四月馬鹿ぼくは死なないなんてねえ
かな文字の筆のそよぎや白牡丹
ほめられて先生くしゃつと笑う春
花うばら仏の顔になるまでを
くもりなき空つまらなし花菱
アマリスホントハヒトリガスキナンダ

秋月 祐一

印画紙に春雪の香の残りけり
中央線飛びこむ春夕焼のなか
百円の文庫選りをり涅槃西風
春灯や鯛のかぶとの目のまはり
逃水のむかうからくる鼓笛隊
春りんだう旅人算の兄と弟
夏近しおつりを入れる募金箱

● 会員作品 ●

秋山 泰

幸福は不幸より出で蕪蒸し
資本金一円で立つ冬の虹
初御空名ばかり国家ハ短調
新春や「人間だもの」間違える
権兵衛は名無しのままでカルタとる
名神に転がりつづけて冬林檎
八月と抱き合いながら核ボタン

明星 舞美

春うちらパンも勝手に焼き上がる
花祭に生まれしやは器量よし
蚕豆やぬくぬく過保護ポチに似て
黒板に傘の落書柿若葉
新樹光乳ガン手術断つて
卒寿にして家のリフォーム風薫る
パープルの館となりてアガパンサス

津田 このみ

蛇穴を出て何歳と聞かれたる
新樹の夜時計はさぬ男かな
草餅や記憶きれいに抜け落ちて
野遊びに交り猫背の宇宙人
くちびるにあまたのつとめ花曇り
空豆にちよんと塩つけ外は雨
花の昼地球にぽんと降ろされて

津波古 江津

うんふうんかわりばんこに冬桜
抜け道の近くて遠い路の臺
雨ふればちよつとふくらむ春の家
ポンペイの腰骨あたり野にあそぶ
さくら咲いて大鍋小鍋すてにゆく
六本脚のおおかみもいて穀雨かな
おぼろ夜の食前薬と食前酒

● 会員作品 ●

坪内 稔典

父の日は木にぶらさがれ父も子も
父の日はカバにまづ会え君たちよ
父の日の坂の登りの木を叩く
びわうれる父だった日が遠ざかり
スケボーは少年を好く雲は夏
反転のスケボー夕べのコウモリも
積乱雲スケボーにある浮遊力

鶴濱 節子

一族が耳を見せ合う雛の家
芭蕉派と蕪村派という春の窓
悪女ぶる女三人蜚鳥賊
木の芽和え漱石好きの従兄弟会
緑さすベッドカバーを取り替えて
羊水に浮いてた記憶木下闇
そら豆に個室わたしに白い雲

中林 明美

早起きす三文得す冴え返る
花六分お巡りさんと地図を見て
春シヨールフランスパンを一つ抱き
帽子押さえて渦潮のうずの上
うず潮やカシャツと音がするカメラ
豆ごはん二階のひとに声を掛け
夏の錆匂う少年逆上がり

中原 幸子

サクラモチクサモチドツチコロンプス
アンの窓ハイジの窓の白い蝶
未生流ですねん足湯あたたかに
こちらたんぽぽあちらスーパージュースデー
花は葉に誤解が理解生むような
ナマ脚のすなり二本という偶数
信号が長いカリフォルニアアポピー

●会員作品●

梨地 ことこ

お水取り賭けると決めた首尾がねえ
白酒をもつて啼いてる野坂昭如
さくら桜リンカーンセンターの窓を
ユニセックス蝶にも蛇にも女にも
レットイトトビー春の月だしおとなだし
飛花落花おじさん無口屋台の夜
京町屋くぐれば涼し素の私

南北 佳昭

うしみつの甘納豆を見たか春
菜の花を縫うて下校の二三人
不愛想な巫女をりにけり青葉風
マンドリンの響くベネチア五月晴
献血に並ぶB型夏の朝
青田風つぎは備前の一宮
ぼうたんや揺れて悩んで佇んで

東 英幸

蒟蒻の味がするなり如月は
アネモネのような外科医でありにけり
怪盗の列車に亀の鳴く日なり
花祭り女は家を出てゆけり
万愚節鶏を筆っていたりけり
花の雨気になるオランウータンと彼と
うどん屋に三時が来たり濃山吹

火箱 ひろ

目覚しが鳴っております雛の部屋
春の夜を血の薄そうな小父さんと
蛇穴を出てより影をひきずって
椿落つまつ赤な午後のひとかけら
いつせいに桜バクハツして平和
春の野にいのちの電話つなぎます
雲雀野に秘密を育て十二歳

● 会員作品 ●

陽山 道子

春泥を来て少年のふくら脛
芽吹き山遅々と進まぬ女たち
永き日の微熱とゆらり昼下がり
ふたたびのジャックとベティ春おぼろ
窓開けて肌に四月の化粧水
生家訪う行きも帰りも春の海
柳絮飛ぶ北の大地のここに立つ

平井 奇散人 きさんじ

秋真昼白湯一杯の静けさよ
秋の暮良寛展に春画展
冬瓜と親父だけいる囲炉裏端
草紅葉先をいそがぬ私小説
アミダくじとうとう一人衣被
秋深し自傷頸に山の襲
無聊なりうす目の猫に鬼胡桃